

aaca トーク「エコロジーとアート」

自然と愚直に格闘する

東京電機大学理工学部教授
建築・都市環境学系

岩城 和哉

建築デザインの教員として東京電機大学埼玉鳩山キャンパスに着任して3年目の2005年から学生と一緒に屋外アートイベントの空間作品づくりに取り組んでいます。鳩山キャンパスで開催される「国際野外の表現展」に参加したのがきっかけです。それ以来、この展覧会には毎年参加し、機会があれば「越後妻有アートトリエンナーレ」、「中之条ビエンナーレ」、「クマガン・ネイチャー・アート・ビエンナーレ（韓国）」等、国内外のアートイベントに遠征しています。

2010年からは空間作品づくりの経験を大学教育にフィードバックする試みとして、建築設計の授業で学生に原寸の空間をつくるという課題に取り組んでもらっています。また、学生食堂の改修案を学生コンペで公募し、ふたつの学食が新たな空間へとリニューアルされました。このように学生と一緒に実践的な空間づくりに取り組むようになってからすでに干支が一巡しました。この間、竹、木材、枯れ枝、合板、塩ビパイプ、パイロン、FRP線材、PETバンドなど様々な素材で実験的な空間づくりを試みています。

これら空間作品の中から今回は「越後妻有アートトリエンナーレ 2015」の作品を紹介します。敷地は新潟県十日町市新町新田の川西ダム上部の高台で、越後三山、信濃川、コシヒカリの水田を見渡せる絶景スポットです。この絶景を主役に見立て、そこに至るまでのアプローチ空間を作品化することを主題としました。コンセプトは「竹のトンネルをぬけるとそこは絶景」です。

参照したのは神社の参道です。参道は俗から聖の領域に人が移行するためのアプローチ空間です。そこでは鳥居、階段、手水鉢といった空間装置によって人の心と体が聖の領域に踏み込むのにふさわしい状態へと整えられます。この参道のように、人工物に囲まれた環境から雄大な自然環境に移行する過程で、作品を訪れた皆さんが自然への感受性を高め、心と体が自然を受け入れるのに適した状態へと整えられる、そのようなアプローチ空間をつくることのできないかと思案しました。

このコンセプトを作品化したものが「妻有絶景 LACHIKU_PENTA（らちく・ぺんた）」です。「らちく」は螺旋と竹を組み合わせた造語であり、「ぺんた」は五角形の断面形状を示しています。五角形に組んだ竹の各辺を螺旋状に回転させながら連結してゆくことで湾曲したトンネル状の空間をつくりました。直線の竹を組んでいるのに出来上がりは有機的な三次元曲面に見え（線織面）、組み立ての原理は単純なのに出来上がった空間は複雑で多様です。単純な原理で多様な様相を生み出すという方法は自然の形態秩序と似ています。

また、竹の隙間から光、風、音、香り、風景といった自然の要素がふんだんに空間内に取り込まれて増幅されます。例えば太陽の光は空間内に明暗のパターンを描き出し、それが時々刻々と変化します。有機的で多様な表情を見せ、自然の要素が増幅されたアプローチ空間をゆっくりと通り抜けることで、

作品を訪れた皆さんの自然への感受性が解放され、研ぎ澄まされます。そして、竹のトンネルをぬけると、そこに雄大な絶景が待っている、そんな作品に仕上がりました。

建築では不安定な自然要素は排除され、安定した生活空間の確保が求められます。一方、アートでは自然と好きなだけ戯れることができます。紹介した作品では480本の孟宗竹を使っています。学生と一緒に竹取りからはじめて、部材取り、穴あけ、運搬、組み立てと全身で竹と格闘しました。それが空間作品づくりの醍醐味かもしれません。これからも自然に対する感受性を高め、自然と愚直に格闘することで、自然に寄り添った新たな空間づくりの可能性を探求したいと考えています。



「妻有絶景 LACHIKU_PENTA」(大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2015)

エネルギーに対するのアプローチ

造形作家 大野 公士

今回、私が AACA 調査研究委員会における「エコロジーとアート」というトークに参加させて頂くことができたのは、2013年に中之条ビエンナーレにおいて3つの作品を制作展示したことがきっかけでした。この作品は「understanding: 慧」「House of wisdom: 知恵の館」「Tree of knowledge: 知恵の実」という3つのパートに別れて、それぞれを中之条町の別々のエリアで展示しました。

「understanding: 慧」は、中之条町で使い捨てられた廃車をエネルギー消費の象徴として解体分解したのちに半分に切断して庭岩として使用し、また、現地付近で収集した苔によって、全体を枯山水として見立て配置し現在の宇宙観を問う作品としました。

「House of wisdom: 知恵の館」は、同じく中之条町で使い捨てられた廃車を、巨大な蚕に見立てて、中之条町で捨てられた金属ゴミを材料に繭を制作しました。この作品は、元六合村の日陰エリアで展示しました。この場所は、過去に養蚕が盛んな場所でした。しかし、現在は中国の安価な絹糸にシェアを奪われて、生産を止めてしまいました。また、第二次世界大戦中には、鉄鉱石が採掘され陸軍により鉄道も施設されましたが、こちらも現在は使用されておりません。

「Tree of knowledge: 知恵の実」は、太陽光発電による電力で照らされるブラックライトの紫外線に、絹糸の蛍光染料が反射して映し出される蓮花座にすわる仏をイメージして制作しました。

これらの3作品は、全て中之条町の営業を中止したガソリンスタンド跡地か、または駐車場において展示を行いました。

なぜ、このような3部作を中之条ビエンナーレにおいて制作しようと考えたのかというと、最初に見学に伺った時、町内の大きな交差点に潰れたガソリンスタンドがまず目についたからです。

中之条町は、多くの地方都市と同じで少子高齢化に悩まされており、ガソリンスタンドの廃業も、原因は無関係ではありませんでした。

また、町内にそびえ立つ大きな送電線の鉄塔は、新潟県にある柏崎刈羽原発から東京に電気を送るものでした。

東日本大震災以降、この送電線には柏崎刈羽からの電気が流されておりません。もちろん、未だ再稼働の目処すらたっていないからです。

このような中之条町が東日本大震災以降、再生エネルギー問題に取り組み、町内に大型太陽光発電施設を設置した、その同じ時期に、アートの祭典である中之条ビエンナーレにおいて、この3部作を発表できたのは本当に良い機会でした。

2011年以降、私自身の制作の方向性として、震災後の原発問題や、今後のエネルギー使用に対する問題を人間という生物全体で考えなければならない、というコンセプトが明確になってきました。ちょうど、この3部作が、エネルギーに対しての

コンセプトが先鋭化されてきた最初の作品といえます。

ポーランドから中之条に来日していたディレクターに、この3部作が目に残ったのも、偶然ではなかったように思います。

翌年2014年には、ポーランドで行われたビエンナーレにも、エネルギーと人間の関係性を問う作品を制作して欲しい、との依頼がありました。私がポーランドに滞在して制作していた頃、日本からは日立製原発をポーランド政府に売りこんでいる最中でした。完成した作品は6パートに別れた大きなテーマ性を表現したものとなりました。

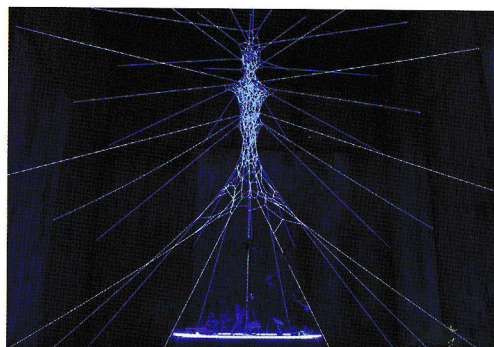
一人のアーティストとして、今後も「ヒト」という生物が、使用するエネルギーの消費によって、どのような結果をもたらすのかを注意深く検証しつつ、その死生観や存在についてのアプローチを、新しい作品として制作してゆくことが目下の課題であります。



understanding: 慧



House of wisdom: 知恵の館



Tree of knowledge: 知恵の実